

中学生のいじめ関連行動と友だちとの関係

吉田知功
善明宣夫

問題

いじめ (bullying) は今に始まったことではなく、日本固有の現象でもないことは今日ではよく知られている。一般に、いじめが諸外国にもみられることが知られるようになったのは1990年代の後半になってからであろう。1996年には「いじめ問題国際シンポジウム」(当時の文部省と国立教育研究所共催)が開催され、各国のいじめの現状や対策などについて意見交換や討議が行われたが、マスメディアもこれを取り上げ、イギリスやノルウェー、オランダ、オーストラリアなどのいじめの実態や対策について紙面上で初めて紹介している(朝日新聞, 1996年6月25日付)。こうした報道をきっかけにして、海外にもいじめが存在することが明らかになり、その後諸外国との国際比較研究が展開されていくなかで、各国のいじめの実態や取組についての理解が広がっていったのである。

ここでいじめがどういうことを意味するのかについて考えてみると、早い時期からいじめ研究に取り組み、各国での調査や研究で引用されることの多いノルウェーのオルヴェウス(Olweus, D., 1993)の定義によれば、「ある生徒が、繰り返し、長期にわたって、一人または複数の生徒による拒否的行動にさらされている場合、その生徒はいじめられている」とされる。この際、拒否的行動とは、意図的に攻撃を加えたり、加えようとしたり、怪我をさせたり、不安を与えたりすること、つまり基本的には攻撃行動の定義に含意されているもので、一回きりのひどいやがらせでも、いじめとみなされることもあるが、基本的にはこうした拒否的行動が繰り返し、長期にわたって行われることが重要であって、偶発的で深刻でない拒否的行動はいじめには含まれないとしている。さらに、いじめには「力関係のアンバランス(非対称的な力関係)」がなければならず、拒否的行動にさらされている生徒は、相手から身を守ることが難しく、相手に対して無力な状態であるのが特徴とされている。

森田(2010)はオルヴェウスに代表される諸外国の定義と、日本の研究者や行政による定義にはいじめ概念を構成する共通の要素がみられるとして、いじめの構成要件として①力関係のアンバランスとその乱用、②被害性の存在、③継続性ないしは反復性、の3点を挙げている。

なお「継続性ないしは反復性」に関しては、他のハラスメントと同様に、たとえ一回であったとしても、それが重大な内容であればいじめと呼びうるとして、自身の定義からからはこの要件を除き、「いじめとは、同一集団内の相互作用過程において優位に立つ一方が、意識的に、あるいは集合的に、他方に対して精神的・身体的苦痛をあたえることである」(森田, 1986)と定義している。なおこの定義にある「集合的に」とは、人が集まることによって群衆行動にも似た状況が作り出される場合があることを含意しているとされている。

ここで日本のいじめの特徴の一つとされる、いじめの集団化について考えてみたい。森田・清永(1986)は、いじめは「いじめっ子(加害者)―いじめられっ子(被害者)」の問題に限定されるものではなく、観衆や傍観者を含む四層構造のなかで発生している問題として捉え「いじめ集団の四層構造モデル」を提唱している。観衆とはいじめをはやし立て面白がって見ている一群で、いじめには直接手を下さないがいじめを積極的に是認するという立場をとる層である。また傍観者とはいじめに対して見てみぬふりをする一群で、その背景には他者の抱えている問題への無関心さ、自分が被害者になることへの恐れ、優勢な力に対する従順さ、集団への同調志向などがあり、この層の大部分はいじめを抑止する力とはならず、現実的にはいじめを暗黙のうちに支持する立場に回るようになると考えられている。

実際に、森田らの調査によれば、いじめ被害の多さは学級内の加害者や観衆の人数よりも傍観者のそれと最も高い相関がみられ、傍観者が多いほどいじめの発生数が増加することが知られている。またイギリス、オランダ、日本を対象とした仲裁者と傍観者の出現率の国際比較によると、仲裁者に関してはどの国も小学校段階での出現率は高いものの、学年が上がるにつれてその割合は減少していた。ところが中学校段階になると、イギリス、オランダでは下がり続けていた仲裁者の出現率が下げ止まり、むしろ上昇に転じるのにくらべ、日本では下降傾向のままであったとされている。また傍観者に関してはどの国も小学校段階では傍観者層は少なく、学年が進むにつれて増えてくるが、イギリス、オランダでは中学校段階になると減少に転じる一方、日本の場合には中学生になっても傍観者数は直線的に増え続け、中学3年

では6割に達することが報告されている(森田ら, 2001, 森田, 2010)。

以上からすると、いじめ問題には傍観行動や集団への同調行動を含む仲間集団の発達や仲間との関係性の問題が大きな影を落としていることが理解される。こうした観点から、いじめの発生率が高い中学校段階に注目して、いじめを仲間集団への同調圧力との関係から捉えようとする研究もみられる。一般に仲間集団は、①小学生(児童期後半)のギャング・グループ(gang-group)から、②中学生(思春期前半)のチャム・グループ(chum-group)を経て、③高校生(思春期後半)のピア・グループ(peer-group)へと発達すると考えられている。これは同調性を前提とするギャング・グループ、チャム・グループから異質性の受容を前提とするピア・グループへの変化でもある。ギャング・グループやチャム・グループでは仲間集団が同一であることが絶対条件とされるため仲間からの同調圧力がかかることになるが、この圧力はきわめて強力であって、おとなからみれば異様と思えるほど仲間と同じであろうとする心理機制が生み出されるとされている(保坂, 2000)。

近年みられる仲間集団の変化の可能性について保坂(2000)は、①ギャング・グループの消失、②チャム・グループの肥大化、③ピア・グループの遷延化を指摘している。塾通いや習い事の一般化、屋外での遊び場の減少、小学校高学年での学力による階層分化や第二次性徴の発現時期のばらつきによる同一感の持ちにくさなどの背景からギャング・グループは消失したとされるが、それに代わって薄められた形でのチャム・グループが児童期から思春期、ひいては青年期全般にかけて肥大化し、結果的に異質性の受容を特徴とするピア・グループの形成が先送りにされているとするのである。また仲間集団の変質といじめとの関係については、この年代でみられるいじめは集団への同調圧力を背景にスケープゴート(scape goat)をつくり出し、一緒にいじめることで集団のまとまり(凝集性)を維持しようとする行為であり、中学生のチャム・グループ段階で行われる失われたギャング・グループ体験として捉えることができるとしている。

こうしてみると、いじめ抑止に向けての対策として、仲間集団(たとえば学級集団)の発達やそこでの関係性の改善が重要な鍵となることが理解される。そこで本研究では、いじめの発生率が高いとされる中学生を対象に、いじめ場面に遭遇した際に自分がとると考えられる行動(たとえば、仲裁行動、観衆的行動、傍観者の行動など)と各行動群の友達とのかかわり方の側面に注目し、両者の関係を明らかにするとともに、中学生の友人関係について発達の観点から検討することを目的としている。

方 法

調査対象

兵庫県A市にあるB公立中学校に在籍する全生徒を調査対象とした。なお調査当日の欠席者を除いた559名(男子274名、女子285名)が以下の分析の対象とされた。その内訳は、1年生168名(男子91名、女子77名)、2年生196名(男子89名、女子107名)、3年生195名(男子108名、女子87名)であった。

調査時期と手続き

2015年10月下旬から11月初旬にかけて、学級担任を通じて調査用紙を配布してもらい、集団で実施した。回答は無記名で、本調査が研究のためだけに使用されるものであり、個人の結果について問題にされることはない旨を教示してもらった。

調査内容

調査票は性別、学年、いじめ場面の呈示とそれに関する質問項目、友達とのつきあい方に関する質問項目で構成された。

1. いじめ場面の呈示

蔵永・片山・樋口・深田(2008)が従来のいじめ研究(杉田ら, 1989、清水・瀧野, 1998、竹ノ山・原岡, 2003、熊谷, 2006、塚本・田名場, 2007)を参考に作成したいじめ場面を使用した。具体的な呈示内容は以下のとおりである。

<いじめ場面>

「ある時、あなたはAが、Aと普段から仲のいいBたちに無視されているのを目撃しました。というのも、AがいくらBたちに挨拶したり、話しかけても、Bたちは知らんぷりをして相手にしないのです。実際に、Bたちがある話題で盛り上がっているときに、Aが入っていきこうとすると、Bたちが急に話をやめ、そっぽを向いてしまうということがありました。このときこの状況を見た周りの誰かが「シーン」と言っただけで、みんななどっと笑いました。周りには、見てみぬふりをする人もいました。それからすぐに話題が変わり、Bたちは他の話題を話し始めました」

2. いじめ関連行動

蔵永ら(2008)がいじめ関連行動をみるために用いた16項目を使用した。これは「Aをなぐさめる」「Bたちと一緒にAを無視する」「見てみぬふりをする」など、自分が呈示された場面におかれたときに、そうした行動をその後とるかどうかについて、「そうしない」～「そうする」の5件法で評定を求めるものである。なお中学

生にとって理解しにくいと考えられる文言に関して、文意から外れない範囲で若干の修正を加えた。

3. 友達とのつきあい方

落合・佐藤（1996）が作成した、友達とのつきあい方に関する質問項目を使用した。これは青年期における友達とのつきあい方を測定するための尺度で、「みんなに好かれていたい」「友達にはありのままの自分は出せない」「友達と意見や考えがくいちがっても自信をなくしたりしない」など35項目で構成され、「まったく当てはまらない」～「非常に当てはまる」の5件法で回答を求めたものである。この尺度は、落合・佐藤（1996）が因子分析を行った結果、6因子解を最適解として、第1因子を、本音を出さない自己防衛的なつきあい方である「防衛的」因子、第2因子を、どんな友達とも仲良しでいたいという「全方向的」因子、第3因子を、自分に自信をもって交友する自立したつきあい方である「自己自信」因子、第4因子を、自己開示し積極的に相互理解しようとするつきあい方である「積極的相互理解」因子、第5因子を、みんなに合わせようとするつきあい方である「同調」因子、第6因子を、みんなから好かれることを願うつきあい方である「被愛願望」因子と命名している。

結 果

1. いじめ関連行動の因子分析結果

いじめ場面を目撃した際のいじめ関連行動16項目について主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った結果、ガットマン・カイザーの基準により3因子解が採択された（Table 1）。

第1因子に負荷量の高い項目は「周りにいてAさんが無視されるのを見ておもしろがる」（.90）、「周りにいてAさんが無視されているのを楽しむ」（.84）、「周りにいてはやしたてる」（.71）、「BさんたちといっしょにAさんを無視する」（.66）、「Bさんたちに協力する」（.65）、「Aさんをさける」（.47）であった。蔵永ら（2008）はこの因子を「はやしたて行動」と命名しているが、「Aを無視する」や「Aをさける」などの直接的な加害行動も含まれていることから、本研究ではこの因子を「加害者同調行動」と命名した。

第2因子に負荷量の高い項目は「誰かといっしょにAさんとBさんたちの間に入り、仲直りするようにさせる」（.81）、「誰かといっしょにBさんたちにやめるように言う」（.68）、「Aさんをなぐさめる」（.60）、「一人でAさんとBさんたちの間に入り、仲直りするようにさせる」（.58）、「Aさんの話を聞いてあげる」（.55）、「Aさんのそばにいてあげる」（.50）、「一人でBさんたちにやめるように言う」（.45）であった。したがって、この因

Table 1 いじめ関連行動に関する16項目の因子パターン行列（Promax 回転後）

項 目	F1	F2	F3
周りにいてAさんが無視されるのを見ておもしろがる	.90	.03	-.10
周りにいてAさんが無視されているのを楽しむ	.84	-.02	-.08
周りにいてはやしたてる	.71	.15	.01
BさんたちといっしょにAさんを無視する	.66	.01	.14
Bさんたちに協力する	.65	.02	.04
Aさんをさける	.47	-.10	.20
誰かといっしょにAさんとBさんたちの間に入り、仲直りするようにさせる	.06	.81	.18
誰かといっしょにBさんたちにやめるように言う	.03	.68	.03
Aさんをなぐさめる	-.13	.60	.03
一人でAさんとBさんたちの間に入り、仲直りするようにさせる	.20	.58	-.07
Aさんの話を聞いてあげる	-.24	.55	-.05
Aさんのそばにいてあげる	-.16	.50	-.12
一人でBさんたちにやめるように言う	.17	.45	-.26
ただ見ている	-.02	.11	.99
見てみぬふりをする	.12	-.01	.76
何もしない	-.03	-.18	.66
因子間相関		F1	F2
	F2	-.36	
	F3	.51	-.62

子は被害者の話を聞いて慰めたり、いじめを仲裁する行動の因子と解釈された。そこで、この因子を「被害者支援行動」と命名した。

第3因子に負荷量の高い項目は、「ただ見ている」(.99)、「見てみぬふりをする」(.76)、「何もしない」(.66)であった。したがって、この因子はいじめをただ見ている、無視するといった行動の因子と解釈された。そこで、この因子を「傍観行動」と命名した。

以上、いじめを目撃した際はいじめ関連行動は、「加害者同調行動」、「被害者支援行動」、「傍観行動」で構成されていたが、抽出された因子数や各因子の内容は蔵永ら(2008)の先行研究と類似した結果であった。なお、いじめ関連行動の得点化に際しては、各因子に.45以上の因子負荷がみられた項目の得点を加算し、各いじめ関連行動得点とした。

2. いじめ関連行動得点の学年別・性別平均値(標準偏差)および分散分析結果

いじめ関連行動の因子分析によってみいだされた「加害者同調行動」「被害者支援行動」「傍観行動」の学年別・性別の平均値(標準偏差)および分散分析の結果をTable 2に示す。

いじめ関連行動における学年と性差を調べるために、各いじめ関連行動を従属変数として、学年(1年・2年・3年)×性別(男子・女子)の2要因の分散分析を行った。

a. 加害者同調行動

性別の主効果($F(1,541) = 23.54, p < .001$)と学年の主効果($F(2,541) = 8.07, p < .001$)および交互作用($F(2,541) = 4.13, p < .05$)が有意であった。そこで

TukeyのHSD法により下位検定を行った結果、男子の場合に、1年と2年および2年と3年の間で有意差がみられ、ともに2年の加害者同調行動の平均値が低かった。

b. 被害者支援行動

学年の主効果がみられたので($F(2,544) = 8.20, p < .001$)、下位検定をTukeyのHSD法により行った。その結果、3年と1年、3年と2年の間で有意差がみられ、双方ともに3年のほうが「被害者支援行動」得点の平均値が低かった。一方、性別の主効果、交互作用に関して有意差はみられなかった($F(1,544) = 0.12, n.s.; F(2,544) = 1.70, n.s.$)。

c. 傍観行動

学年の主効果がみられたので($F(2,544) = 7.45, p < .001$)、下位検定をTukeyのHSD法により行った。その結果、2年と3年の間で有意差がみられ、2年よりも3年の方が「傍観行動」得点の平均値が高かった。一方、性別の主効果と交互作用には有意差はみられなかった($F(1,544) = 0.01, n.s.; F(2,544) = 2.73, n.s.$)。

3. 友達とのつきあい方の因子分析結果

落合・佐藤(1996)の作成した35項目で構成される友達とのつきあい方質問紙について主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。初回の因子分析の結果、解釈が可能な因子構造が得られなかったため、因子負荷量の低い(絶対値.35以下)の6項目を削除し、残りの29項目に対して再度因子分析を行った結果、スクリー基準により6因子解が採択された(Table 3)。

各因子を構成する項目が落合・佐藤(1996)の先行研究結果とほぼ一致したため、落合らに準拠し、第1因子

Table 2 いじめ関連行動の学年別・性別の平均値・標準偏差および分散分析結果

	1年		2年		3年		F値		
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	学年	性別	交互作用
加害者同調行動									
全体	9.47	4.03	8.23	3.22	9.88	4.22	8.07***	23.54***	4.13*
男子	10.02	4.23	8.60	3.49	11.12	4.37			男:1・3年>2年
女子	8.81	3.68	7.92	2.97	8.32	3.46			
被害者支援行動									
全体	23.06	5.50	23.86	5.41	21.54	5.74	8.20***	n.s.	n.s.
男子	23.14	5.48	24.23	5.32	20.93	6.16	1・2年>3年		
女子	22.96	5.56	23.55	5.49	22.28	5.41			
傍観行動									
全体	6.98	3.26	6.42	3.11	7.71	3.37	7.45***	n.s.	n.s.
男子	6.92	3.53	6.05	3.07	8.10	3.35	3年>2年		
女子	7.04	2.92	6.72	3.12	7.23	3.36			

* $p < .05$

*** $p < .001$

Table 3 友達とのつきあい方に関する35項目の因子パターン行列 (Promax 回転後)

項 目	F1	F2	F3	F4	F5	F6
どんな人とも仲良くしようと思う	.88	-.03	-.01	.01	-.05	-.02
どんな人ともずっと友達でいたい	.79	-.07	-.01	.08	.03	-.04
どんな友達とも仲良しでいたい	.79	.08	-.02	-.04	.01	.02
どんな友達とも楽しくつきあいたい	.75	.05	.06	-.08	-.03	.04
どんな友達とも協調し合いたい	.71	-.01	.02	.03	.07	.01
友達と本音で話すのはさけている	-.03	.71	-.01	.06	.02	-.07
傷つきたくないの、友達には本当の姿を見せられない	-.07	.69	-.03	.17	-.02	.03
友達とは本音で話さないほうがいい	-.01	.66	.09	.01	-.16	-.04
友達にはありのままの自分は出せない	-.03	.65	-.01	.11	.11	-.08
友達に自分のすべてをさらけ出すのは危険である	-.01	.63	.16	.02	.03	-.01
友達には自分の考えていることを全部言う必要はない	.11	.56	-.01	-.27	.02	.13
だれにでも好かれるのは無理だと思っている	-.15	.43	-.01	-.20	.21	.02
みんなとぶつかり合うのはさけている	.12	.38	-.01	-.02	-.05	.06
友達と本音でぶつかり合っても、自信をなくしてしまうことはない	.01	.03	.78	.03	.01	-.03
友達と意見が対立しても、自信をなくさないで話し合える	.09	.02	.75	.03	.02	-.01
友達と意見を交わしあっても、それほどまどわされない	-.01	.11	.64	-.02	-.09	.10
みんなと意見が違って、できるだけ自分の意見を言うようにしている	-.01	-.04	.49	.04	.06	.04
友達と本音でぶつかり合っても平気である	-.03	-.07	.41	.03	.23	-.08
友達と意見や考えがくいちがっても自信をなくしたりしない	.01	.11	.39	-.03	.06	.05
みんなと違うことはしたくない	.03	-.01	.10	.76	-.12	-.09
みんなと何でも同じでいたい	-.07	-.11	.07	.71	-.03	.13
友達に自分を理解してもらえないと自信がもてない	-.04	.04	-.24	.40	.12	.20
みんなと意見を合わせようと思う	.21	.25	-.21	.35	.15	-.05
友達と本音を言い合うことで、傷ついても仕方ない	-.05	.08	.09	-.02	.76	-.03
友達と分かり合おうとして傷ついても仕方ない	.06	.12	-.04	-.07	.65	.04
友達と本当の姿を見せ合うことで、少しくらい傷ついてもかまわない	.08	-.19	.10	.01	.49	.01
友達とは少しくらい傷ついても本当のことを言い合いたい	-.04	-.32	.05	.08	.44	-.01
みんなから愛されたい	-.02	.01	.07	.05	.01	.92
みんなに好かれていたい	.06	.01	.02	.04	-.01	.81
因子間相関		F1	F2	F3	F4	F5
	F2	-.24				
	F3	.23	-.42			
	F4	.28	.23	-.35		
	F5	.35	-.38	.51	-.05	
	F6	.49	-.18	.07	.34	.26

を「全方向的」(どの人とも同じように仲良くつきあっていたいとかかわり方)、第2因子を「防衛的」(友達に対して本音を出さず、自分のありのままの姿を見せないという防衛的なかわり方)、第3因子を「自己自信」(互いの考え方に違いがあっても、迷ったり自信を無くすことなく、友達とつきあっていくとかかわり方)、第4因子を「同調」(まわりの友達と同じでいたいとかかわり方)、第5因子を「積極的相互理解」(た

とえ傷つくことがあるとしても、友達とは本当の姿を見せあい、互いに分かり合おうとするかわり方)、第6因子を「被愛願望」(友達みんなから愛され、好かれたいとかかわり方)と命名した。なお友達とのつきあい方の得点化に際しては、各因子に.35以上の因子負荷がみられた項目の得点を加算し、各友達とのつきあい方得点とした。

4. 友達とのつきあい方得点の学年別・性別平均値（標準偏差）および分散分析結果

友達とのつきあい方の因子分析により抽出された「全方向的」「防衛的」「自己自信」「同調」「積極的相互理解」「被愛願望」の学年別・性別得点の平均値（標準偏差）および分散分析の結果を Table 4 に示す。

6 因子における学年・性差を調べるために、それぞれの友達とのつきあい方を従属変数として、学年（1年・2年・3年）×性別（男子・女子）の2要因の分散分析を行った。

学年の主効果が有意であったのは、「同調」($F(2,544) = 5.53, p < .01$)のみであった。そこで「同調」に関して Tukey の HSD 法により下位検定を行った結果、1年と2年の間で有意差がみられ、2年よりも1年のほうが「同調」得点の平均値が高かった。また性別の主効果がみられたのは「積極的相互理解」($F(1,544) = 15.75, p < .001$)と「被愛願望」($F(1,545) = 7.61, p < .01$)の2つであり、ともに男子に比べ女子の平均値

のほうが高かった。なお、交互作用はすべての因子において有意差がみられなかった（「全方向的」($F(2,541) = 0.79, n.s.$)；「防衛的」($F(2,535) = 2.69, n.s.$)；「自己自信」($F(2,540) = 0.75, n.s.$)；「同調」($F(2,544) = 0.88, n.s.$)；「積極的相互理解」($F(2,544) = 0.48, n.s.$)；「被愛願望」($F(2,545) = 0.02, n.s.$)）。

5. いじめ関連行動と友達とのつきあい方との関連

いじめ関連行動3因子と友達とのつきあい方6因子との相関係数（ピアソンの積率相関係数）を算出した（Table 5）。相関係数の値は全般的に高いものではなかったが、一般に低い相関がみられるとされる相関係数の絶対値が0.2~0.4の結果を取りあげてみると、加害者同調行動では全体と男子において「全方向的」で負の相関がみられ、男子の「自己自信」にも負の相関がみられた。被害者支援行動については全体と男子、女子ともに「全方向的」で正の相関がみられ、男子の「積極的相互理解」にも正の相関がみられた。また傍観行動では全体

Table 4 友達とのつきあい方の学年別・性別の平均値・標準偏差および分散分析結果

	1年		2年		3年		学年	F 値	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		性別	交互作用
全方向的									
全体	18.56	4.98	19.05	4.75	18.38	4.77	n.s.	n.s.	n.s.
男子	18.61	4.88	18.49	5.04	17.92	5.20			
女子	18.49	5.13	19.50	4.47	18.93	4.17			
防衛的									
全体	24.70	5.91	23.89	6.09	24.56	5.16	n.s.	n.s.	n.s.
男子	24.27	5.80	24.69	6.31	25.32	5.00			
女子	25.20	6.04	23.23	5.86	23.67	5.23			
自己自信									
全体	19.51	5.10	20.52	4.41	20.46	4.01	n.s.	n.s.	n.s.
男子	19.60	4.98	20.88	4.78	20.24	4.40			
女子	19.41	5.28	20.23	4.09	20.72	3.49			
同調									
全体	11.21	3.38	10.07	3.21	10.55	3.18	5.53**	n.s.	n.s.
男子	11.34	3.41	9.87	3.25	10.77	3.46	1年>2年		
女子	11.06	3.36	10.23	3.18	10.28	2.79			
積極的相互理解									
全体	13.30	3.23	13.73	3.34	13.77	2.94	n.s.	15.75***	n.s.
男子	12.91	3.14	12.96	3.51	13.36	2.80		女子>男子	
女子	13.77	3.29	14.39	3.05	14.27	3.03			
被愛願望									
全体	6.41	2.25	6.20	2.15	6.41	2.13	n.s.	7.61**	n.s.
男子	6.15	2.20	5.93	2.24	6.19	2.25		女子>男子	
女子	6.71	2.28	6.41	2.06	6.68	1.97			

** $p < .01$

*** $p < .001$

Table 5 いじめ関連行動と友達とのつきあい方の相関

		全方向的	防衛的	自己自信	同調	積極的相互理解	被愛願望
加害者同調行動	全体	-.23**	.13**	-.18**	.16**	-.16**	-.08
	男子	-.28**	.10	-.20**	.13*	-.14*	-.05
	女子	-.15*	.13*	-.16*	.18**	-.10	-.06
被害者支援行動	全体	.32**	-.19**	.16**	.05	.19**	.16**
	男子	.30**	-.19**	.17**	.09	.22**	.14*
	女子	.34**	-.17**	.16*	-.01	.16**	.17**
傍観行動	全体	-.29**	.25**	-.21**	.13**	-.18**	-.11**
	男子	-.26**	.23**	-.22**	.09	-.19**	-.11
	女子	-.33**	.24**	-.21**	.15*	-.17**	-.12

** $p < .01$ * $p < .05$

と男子、女子ともに「防衛」に正の相関、また「全方向的」と「自己自信」に負の相関がみられるという結果であった。なお「同調」と「被愛願望」に関しては、どのタイプのいじめ関連行動とも相関はみられなかった。

考 察

本研究は、いじめの発生率が高いとされる中学生を対象に、いじめ場面に遭遇した際に自分がとると考えられる行動と各行動群の友達とのかかわり方の側面に注目し、両者の関係を明らかにするとともに、中学生の友人関係について発達の観点から検討することを目的とした。

1. いじめ関連行動の学年および性差

いじめ関連行動についての分散分析の結果から、傍観行動は2年生に比べ3年生に多くみられ、被害者支援行動は1年生、2年生に比べ3年生のほうがみられにくかった。被害者支援行動に関する質問項目には「Aをなぐさめる」といった支援行動ばかりでなく、「Bたちにやめるように言う」などの仲裁行動に関する内容が多く含まれていることからすると、森田ら(2001)の小学生、中学生を対象とした国際比較研究で示されている、日本の場合には学年が上がるにつれて仲裁者の割合は減少し、傍観者の割合が増加するという指摘と概ね一致する結果が得られたということができよう。

また、はやしたて行動を含む加害者同調行動に関しては、男子の場合に2年生に比べ1年生と3年生に多くみられるという結果であった。2年生の得点が最も低かった理由については明らかではないが、学年団によるいじめに対する指導の違いなどが影響していることも考えられる。

2. 友達とのつきあい方の学年および性差

友達とのつきあい方に関する分散分析の結果から、男子に比べ女子のほうが「積極的相互理解」と「被愛願望」の得点がより高いことが分かった。このことは、男子に比べ女子のほうが、友人関係において自己を開示し積極的に相互理解しようとする傾向が強く、またみんなから好かれたいと願っていることを示している。落合・佐藤(1996)の研究では、「積極的相互理解」はより発達した友人関係の指標とされている。また仲間集団の発達に関する保坂(2000)の研究でも、共通点・類似性だけではなく、お互いの異質性をぶつけ合うことによって他者との違いを明らかにしながらも、そうした違いを乗り越えたところで、自立した個人として互いを尊重し合うというピア・グループ段階での特徴とされている。こうしたことから、中学生の段階では、友人関係のあり方に関して男子に比べ女子のほうが、より発達が進んでいることがうかがえる。

また男子に比べ女子のほうが、みんなから好かれたいという被愛願望がより強かった。この点に関連して、塚本・濱口(2003)は中学生を対象とした友人関係満足感の研究において、親和動機の下位尺度である「拒否不安」は男子に比べ女子のほうが有意に高いことを報告している。またこの背景として、中学生女子の友人関係は緊密性が強く閉鎖的であるので、一度でも仲間のグループから外れた場合に元のグループに戻る事が難しくなることから、拒否されることに過度の不安を抱きやすいのではないかとしている。こうした、グループから拒否され、外されることへの不安が背景にあって、みんなから好かれたい、愛されたいという被愛願望が強まっていることが考えられる。

学年差に関しては、全般的に学年による大きな変化は認められなかったが、2年生に比べ1年生のほうに「同調」傾向がより強くみられた。この理由としては、中学

校生活への慣れの問題が考えられよう。2年生に比べ1年生のほうが新しい環境に入って時間が経っていないこともあり、自分の地を見せず、とりあえずみんなに合わせようとする同調傾向がみられやすいのではないかと考えられる。

3. いじめ関連行動と友達とのつきあい方

加害者同調行動と傍観行動は、友達とのつきあい方の「同調」（まわりの友達と同じでいたいとするかかわり方）との関連が予想されたが、そうした関連はみられなかった。こうした結果から、いじめ場面での加害者や周囲の傍観者への同調と、普段の友人関係における同調傾向には直接的な関係はみられないことがうかがえる。

被害者支援行動では、男女とも友達とのつきあい方の「全方向的」（どんな友達とも仲良くつきあいたいとするかかわり方）と正の相関がみられた。また男子だけではあるが「積極的相互理解」（自己開示し積極的に相互理解しようとするつきあい方）と正の相関がみられた。こうしたことから、被害者支援行動がみられやすい生徒（以下、被害者支援行動群と略）は広がりのある友人関係の中で、ただみんなに合わせるのではなく、自分の本音を出しながら相互理解しようとする、より発達した友人関係がみられるのが特徴であった。また加害者同調行動では友達とのつきあい方の「全方向的」並びに、男子の「自己自信」（自分に自信をもって交友する自立したつきあい方）に負の相関がみられ、傍観行動では、男女とも「全方向的」と「自己自信」に負の相関がみられた。こうしたことから、加害者同調行動や傍観行動がみられやすい生徒（以下、加害者同調行動群および傍観行動群と略）は限られた友達の中で、傷つくのを恐れ意見や考えがぶつかるのを避けようとする特徴がみられた。

このように加害者同調行動と傍観行動には友人関係においてよく似た相関パターンが認められたが、「防衛」（本音を出さない防衛的なつきあい方）では違いがみられ、傍観行動では「防衛」に正の相関がみられたが、加害者同調行動では相関がみられなかった。このことから、いじめを目撃した後に加害者同調行動を起こすか傍観行動をとるかは、一つには友達との関係において防衛的なかかわり方をしているかどうかという友人関係のあり方が影響しており、そうした傾向が強いほど傍観行動がみられやすくなることが考えられる。その理由は定かではないが、傍観行動群の友人関係の特徴である自分をさらけ出すことにためらいを覚え、本音を隠そうとする傾向が、本音の顕在化を伴う加害者同調という直接的行動を抑制するのではないかと考えられよう。

以上、いじめ関連行動と友達とのつきあい方の結果をみると、被害者支援行動群と加害者同調行動群、傍観行動群には友人関係の広がりやその深さ（本音を出して分

かりあおうとするか、本音を隠して表面的につきあおうとするか）において対照的な特徴がみられ、被害者支援行動群は広く深い友人関係を、加害者同調行動群と傍観行動群は狭く浅い友達とのつきあい方をしていることが明らかとなった。

総合的考察

これまで、いじめ関連行動と友達とのつきあい方を中心に考察を行ってきた。被害者支援行動群は、広がりのある友人関係の中で、自分の本音も出しながら積極的に相互理解を図ろうとしているのが特徴であった。これとは対照的に、加害者同調行動群と傍観行動群は、限られた友達の中で、傷つくのを恐れ意見や考えがぶつかるのを避けようとする傾向がみられた。また、「同調」や「積極的相互理解」、「被愛願望」といったその他の友人関係のあり方においても、加害者同調行動群と傍観行動群にはよく似た特徴が認められている。ただ両群の違いとしては、傍観行動群では本音を出さない防衛的なつきあい方がみられたが、加害者同調行動群にはそうした特徴がみられなかった点があげられる。友人関係のあり方という側面からすれば、こうした行動の違いは、傍観行動群にみられる素直な自己表出をためらい本音を隠そうとする傾向が、本音が顕在化する直接的行動（加害者同調行動）の表出に抑制的に作用した結果ではないかと考えられる。

ここで特に注目したいのは、いじめ関連行動における加害者同調行動、傍観行動、被害者支援行動の関係性の問題である。上記のように、友達とのつきあい方に関して、加害者同調行動と傍観行動にはよく似た特徴がみられる。またいじめ関連行動の因子分析結果でも、加害者同調行動と傍観行動には正の因子間相関（.51）がみられ、これら2つの行動と被害者支援行動には負の因子間相関（加害者同調行動 -.36；傍観行動 -.62）がみられている。こうした結果は、加害者同調行動と傍観行動には親近性があり、これらの行動と被害者支援行動は対照的な関係にあることを示している。これは本研究における傍観行動群が、従来から言われてきたような、助けたいけれども被害者になることへの恐れから傍観行動をとってしまい、結果的に葛藤や自責の念に苦しむといった仲裁者の立場寄りの傍観者ではなく、むしろ加害者や観衆の立場に近い傍観者であることを意味している。

これに関連して森田・清永（1986）は、いじめでの立場の違いと学級場面での価値意識を関連づけて分析を行った結果、被害者、加害者、被害・加害者、観衆、傍観者、仲裁者はそれぞれ異なった価値意識の基盤の上にたって行動しているとしている。さらに各立場の価値意識の分析結果から、傍観者層を「いじめでは局外に立ち

ながらも、決して加害者や観衆には批判的な意識をもたず、むしろある部分では共感を示しつつ、ほかの級友たちとも安定した人間関係を築いているグループである」として、加害者や観衆との親和性を示唆している。したがって、本研究で傍観行動と加害者同調行動に親近性がみられたということは、こうした森田の示唆した傍観者像を支持する結果といえることができる。ただし、本研究の場面設定が「無視・仲間はずれ」を対象としたものであり、塚本・田名場（2007）が「無視・仲間はずれ」では傍観行動よりも加害行動がとられやすい傾向にあると指摘していることからすると、いじめの内容（例えば、身体的攻撃）によっていじめ関連行動のあらわれ方に変化が生じることも予想される。こうしたことから、今回の結果はあくまでも「無視・仲間はずれ」といったタイプのいじめにみられる傾向であって、いじめ全般にわたるものではないということには注意が必要であろう。

最後に、被害者支援行動群と加害者同調行動群、傍観行動群の友達とのかかわり方に既述のような顕著な違いがみられたことから、学校におけるいじめ抑止に向けての対策の一つとして、被害者-加害者関係の改善にとどまらず、生徒全体を含めた友人関係のあり方の改善という視点からの教育的支援の必要性が示唆されたことも収穫の一つであった。ただし本研究の問題点として、調査結果はあくまでも「いじめ目撃場面」を設定した際の生徒の反応であって実際のいじめ行動を対象としたものではない点、またいじめ場面が「無視・仲間はずれ」という心理的攻撃に限定されている点、さらには被害者が親しい友人かそうでないかという被害者との親密性を考慮していない点などについては問題も残り、今後こうした観点を含めたより詳細な検討が望まれる。

〈付記〉

本稿は、吉田知功が2015年度に関西学院大学文学研究科（総合心理学専攻学校教育学領域）に提出した修士論文に加筆したものです。なお資料の収集に当たりご協力をいただきました関係者の皆様方に心より感謝申し上げます。

引用文献

- 保坂 亨 2000 学校を欠席する子どもたち—長期欠席・不登校から学校教育を考える 東京大学出版会
 熊谷 隼 2006 いじめ被害者への否定的評価に関する要因分析—シナリオを用いた質問紙実験 東洋大学大学院紀要 **43**, 35-54.
 蔵永 瞳・片山 香・樋口匡貴・深田博己 2008 いじめ場面における傍観者の役割取得と共感が自身のいじめ関連行動に及ぼす影響 広島大学心理学研究 **8**, 41-51.
 森田洋司（監修）2001 いじめの国際比較研究—日本・イギリス・オランダ・ノルウェーの調査分析 金子書房
 森田洋司 2010 いじめとは何か 中央公論新社

- 森田洋司・清永賢二 1986 いじめ—教室の病い 金子書房
 落合良行・佐藤有耕 1996 青年期における友達とのつきあひ方の発達的变化 教育心理学研究 **44**, 55-65.
 Olweus, D. 1993 *Bullying at School: What we know and what we can do*. Blackwell. (オルヴェウス, D., 松井資夫・角山 剛・都築幸恵（訳）1995 いじめ—こうすれば防げる 川島書店)
 清水貴裕・瀧野揚三 1998 いじめの加害者に影響する被害者と第三者の反応 大阪教育大学紀要第IV部門 **46**, 2, 347-363.
 杉田明宏・若松養亮・杉山弘子・菊池則行・片岡 彰・菊池武剋・寺田 晃 1989 中学生のいじめに対する態度とその背景—対人関係からのアプローチ 青年心理学研究 **3**, 29-38.
 竹ノ山圭二郎・原岡一馬 2003 いじめ状況想起におけるいじめ判断についての立場間比較 久留米大学心理学研究 **2**, 49-62.
 塚本貴文・濱口佳和 2003 親和動機と攻撃性および社会的スキルが友人関係満足感に及ぼす影響—中学生の場合 筑波大学発達臨床心理学研究 **15**, 45-55.
 塚本琢也・田名場 忍 2007 いじめ場面における第三者の傍観・仲裁行動の発生・抑制要因の探索的研究 弘前大学大学院教育学研究科心理臨床相談室紀要 **4**, 19-29.

（よしだ ともり・追手門学院大手前
 中・高等学校非常勤講師）
 （ぜんみょう のぶお・関西学院大学教授）